イベント・シンポジウム等実績報告書　配分事業費：1,200千円

室内楽演奏会2016

目的・趣旨

本プロジェクトは教員の指導のもと、学生が主体的に実施する「世界音楽」を対象とする演奏会であり、学生がこのプロジェクトを通して、現場を学び、体験し、自身の肌を通して、アートマネジメントの一面を学ぶことを目的としている。

日時・場所

平成28年4月1日から平成29年3月31日
「浜松の音楽イベントを知る、学ぶ」平成28年6月2日　281講義室
「高石ともやトークコンサート」平成28年7月23日　講堂
「インドネシア･スンダ地方の伝統音楽レクチャー＆コンサート」平成28年10月22日　自由創造工房
「テルミンの音世界～操られる音、紡ぎだされる音　トーク＆演奏」平成28年12月10日　音楽室
「龍山に響くパイプオルガンコンサートⅡ」平成29年3月25日　浜松市龍山森林文化会館

体制

（実施代表者）文化政策学部　芸術文化学科　教授　梅田英春
（実施分担者）文化政策学部　芸術文化学科　教授　奥中康人
（実施分担者）文化政策学部　芸術文化学科　講師　上山典子
（運営アドヴァイザー）文化・芸術研究センター　調査員　冨田晋司
梅田が総括者となり、地域連携実践演習で「室内楽演奏会」を履修した1年生13名、自主参加した2年生4名と3年生5名が主体となり、企画・運営・予算管理を実施した。

共催・後援等

浜松市、浜松市教育委員会、浜松市文化振興財団、新聞社、ラジオ、テレビ局等

内容

講座、トークコンサート、レクチャーコンサート

結果・成果

「浜松の音楽イベントを知る、学ぶ―創造都市・音楽分野に加盟した浜松のこれから」講師（浜松市文化振興財団）：島田篤志、松本麻未［入場者30名］…本講座は室内楽演奏会の内、唯一、講座形式である。浜松の音楽環境、ｲﾍﾞﾝﾄ、財団の役割を知るために重要なものであり、今後、実施される室内楽演奏会の運営、翌年度の企画会議の中で、大学として行うｲﾍﾞﾝﾄとはどうあるべきか、浜松市文化振興財団で実施されているｲﾍﾞﾝﾄとの差別化等の視点を身に着ける上で非常に有用な講座であった。
「高石ともやトークコンサート」トーク・演奏：高石ともや［入場者390名］…監修者である梅田が企画するｼﾘｰｽﾞ「音楽の力」の3回目（2015年度2回実施）となる。室内楽演奏会2016の中で唯一の有料公演であったことから、学生を中心に様々な広報活動を展開。結果、271名の有料入場者を確保することができた。企画・運営の成果としては広報の成果が出たこと、また顧客の多くがこれまでほとんど大学を訪れたことのない60～70歳代の観客であったこと、さらに学生達には1960年代の日本とﾌｫｰｸｿﾝｸﾞと当時の社会の関わりについて実際のｱｰﾃｨｽﾄを通じて学べたことが大きな成果だった。
「バンドゥンからの音便り～ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ・ｽﾝﾀﾞ地方の伝統音楽レクチャー＆コンサート」講師：福岡正太（国立民族博物館）、演奏：パラグナ・グループ［入場者122名］…昨年、ｼﾞｬﾜ島のﾊﾞﾝﾄﾞｩﾝ市が浜松市と文化・環境に関して協定を結んだことから、ﾊﾞﾝﾄﾞｩﾝの伝統音楽に焦点を当てて実施した。ほとんどの浜松市民がﾊﾞﾝﾄﾞｩﾝ市がどこにあるかも知らない状況の中で、その地域の特性や音楽を通して市民に対してﾊﾞﾝﾄﾞｩﾝを認識していただけたことが大きな効果だったと考える。運営に携わる学生も未知のｼﾞｬﾝﾙの音楽に取り組み、「その音楽を学ぶ」姿勢を身に着けられたことは大きな成果だった。
「テルミンの音世界～操られる音、紡ぎだされる音　トーク＆演奏」講師・演奏：竹内正実［入場者50名］…昨年度、楽器博物館でﾃﾙﾐﾝに焦点を当てた展示が行われたことから、この楽器に新たに興味を持った市民が集まった。学生にとっては20世紀初頭に発明された新しい楽器との出会いであり、実際の楽器に触れる体験ができたことは大きな成果だった。運営ｽﾀｯﾌの学生は、講演者との打ち合わせの難しさを幾度も経験し、そうしたものをどのように解決していくかという経験ができた、まさに運営する学生達が大きく成長できたｲﾍﾞﾝﾄと考える。
「風と川と音と～龍山に響くパイプオルガンコンサートⅡ」演奏：新山恵理、トーク：梅田英春［入場者130名］…龍山に設置されているが、近年、ほとんど利用されず、市民に忘れ去られたﾊﾟｲﾌﾟｵﾙｶﾞﾝの活用を目的に昨年度に続き2回目のｺﾝｻｰﾄを実施した。本ｲﾍﾞﾝﾄは浜松市にある資源の活用、山間地域への誘客などを目的に実施したもので、その2つの目的は十分に達成できたと考える。また本ｲﾍﾞﾝﾄを実施するにあたり、学生自身が教員の指導のもと、はままつ文化ｻﾎﾟｰﾄ事業に申請し、30万円の助成を受けることができた。こうした申請書の書き方を学べたことも学生には大きな成果といえよう。
<u>＜本事業にとってイベント開催以外の重要な活動＞</u>本事業はｲﾍﾞﾝﾄを実施するための準備・運営を監修者である教員、また運営を指導する調査員のもとで実施してきたものであるが、これはあくまでも前年度に決まったｲﾍﾞﾝﾄの実施にすぎない。本ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでは、こうしたｲﾍﾞﾝﾄの準備・運営のほか、学生のﾒﾝﾊﾞｰたちは9月から翌年度に実施を予定するﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑに関する企画会議を毎週行っていることを付記しておく。なぜなら、この企画のﾌﾟﾛｾｽは学生の教育的側面として非常に重要な点であるからである。企画を行うにあたり提案者は、ｲﾍﾞﾝﾄの趣旨（それが大学で行うにふさわしいｲﾍﾞﾝﾄであるかどうか）、内容、予算などを考え、全員の前でﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝを行わなければならない。そうした案の中から来年度の室内楽演奏会のﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑが決定し、提案した学生達はそれらのｲﾍﾞﾝﾄの責任者となりｲﾍﾞﾝﾄを実施している。ｲﾍﾞﾝﾄはやっつけ仕事ではない。少なくても1年以上前から企画し、それを何度も練り直し、予算の作成、出演者との交渉、予算の管理、運営準備を行い当日を迎えるものである。そういう意味でこの点が、この活動のもっとも大きな教育的成果といえよう。大学のｲﾍﾞﾝﾄが社会的貢献を行うのは当たり前である。それを成果として強調するのは当然であるが、加えて教育的効果が非常に高いというのがこのｲﾍﾞﾝﾄの特徴といえよう。